

「叱り」と主体性に関する一考察

—保育者を対象とした調査から—

聖園学園短期大学 准教授 金 澤 久美子

A Study on the Relationship between “Scolding” and Autonomy
— From the Survey targeting Childcare Providers —

KANAZAWA Kumiko

Associate Professor, Misono Gakuen Junior College

要 約

子どもは幼児期に褒められたり叱られたりしながら成長していく。保育の場では遊びや活動の中で子どもの主体性を育てることを大事にしているが、叱る場面において主体性を育てることとは矛盾しないのだろうか。本研究は本学を卒業して保育職歴3年目の卒業生25名を対象として、子どもを叱るときにどのようなことを意識しているのかについて調査研究をしたものである。

「子どもが叱られたことを納得していく理由付け」として、幾つかの項目をあげ、保育者がどの程度望ましいと思っているのかについて検討し「叱ることが主体性の妨げにならないか」についても回答を求め、分析をした。

ほとんどの保育者は「叱ることはときとして主体性の妨げになる」という実感を持ちながら、叱る際に妨げにならないための幾つかの手立てを講じて、子どもの学びに繋げようとしていることが推察された。今後は対象人数を増やした調査や、「主体性」を保育者がどう捉えているのかについても検討していきたい。

キーワード：叱り、幼児教育、主体性、保育者、学び

Key words : scolding, early childhood education, autonomy, childcare provider, learning

目次

はじめに

第1章 先行研究

第1節 「叱り」に関する先行研究

第2節 主体性に関する先行研究

第2章 保育者への調査

第1節 研究方法

第2節 調査結果

- 1 叱ることに対するためらい
- 2 叱るときに心がけていること
- 3 叱られたことを子どもはどう納得するのか
- 4 主体性との関連

第3節 考察

- 1 叱ることは必要なことか
- 2 叱る際のためらいについて
- 3 叱るときに保育者が心がけていること
- 4 叱ることは主体性の妨げになるのだろうか
- 5 叱りと主体性の育ちについて

第3章 まとめと今後の課題

はじめに

子どもは幼児期に褒められたり叱られたりする経験を積み重ねながら成長していく。子育てや教育の場でも子どもを「上手に褒めなさい」というのはよく聞く言葉であるが、叱り方に苦勞している親や教師は実に多い。叱っても素直に子どもが従わない場合もあり、「叱る」ことは様々な葛藤を喚起する。何より子どもにとってそれは自分の行動を否定されるという不快な体験であり、叱る側と叱られる子どもとの間に衝突が発生することもある。

また、一度叱られたからといってその効果がすぐには出ずに、同じことが繰り返される場合もあるので、何度も叱るとするのはエネルギーのいる行為である。「叱る」ことの目的は「望ましくない行動を改めさせる」とか「望ましい行動を身に付けさせる」ということであり、叱る側には叱られることによって子どもがそれを身につけて欲し

いという期待がある。しかし、期待した結果にならず、繰り返し叱るということを経験を得ないこともよくあることである。一方で厳しく叱りつけることによって子どもがその行動を止めるという場合でも、叱る側にとって望ましい結果になればそれで解決、とはいかないこともある。その行動が何故いけないのかということよりも、強く叱られて嫌だったということしか印象に残らない場合があるので、子どもの心に何が残るのかという配慮が大事である。大人しく叱られて従っているように子どもが振舞っても、叱る人がいない場所では違った振舞いをしたり、子どもの行動が場面を選んで繰り返されたり定着しない場合は、「叱る」ことは結果的には教育的ではなかったということになる。

また、叱り方によっては子どもとの信頼関係が崩れたり、子どもの心に傷を残す場合もあるので、叱られたことへの子どもにとっての意味付けが重要である。

保育の場でも教育の場でも「主体性」を育てることや「主体的」に行動することが大切であるとされているが、では「叱られる」ということは主体性を育てることと矛盾しないのだろうか。「叱る」「叱られる」という上下関係のある間柄でなされる体験が、「主体性」を育てていく上で、どのような影響があるのかについて検討してみたい。

第1章 先行研究

第1節 「叱り」に関する先行研究

榎本（2012）は「叱られるばかりでは委縮してしまい、自己肯定感が育たない」と述べている⁽¹⁾。叱られることによって現実の自分の姿は否定されてしまうので、自己肯定感は低下するであろうし、それが続くと自己肯定感が育たないというのは想像に難くない。また、社会人になっても厳しい上司に叱責ばかりされていると、委縮してしまうということがあるが、子どもの場合は親や教師との関係の中で「顔を伺いながら行動する」という形で、より顕著に現れてくるので、主体性の育ち

を損ねてしまうという大きな問題を孕んでいると思われる。

吉岡(2011)は『叱ること』についての臨床教育学的考察の中で、子育て全般に関する相談会の講師をする際に、事前に保護者の悩みをアンケートで募ったところ、3分の1近くが「叱ること」をめぐった悩みであったことを言及している⁽²⁾。叱ることは叱り手にとっても葛藤であり、「上手な叱り方はないものか」と悩む親は多い。筆者も子育て中には、叱っても子どもが何度も同じ行動を繰り返し、叱責の口調がきつくなったり、感情的になってしまったりすることが何度もあった。

川島(2004)は「子どもの叱り方について」という論文の中で大学生を対象として中学生時の親からの叱られ体験を想起させ、嫌な叱られ方について分析をしている⁽³⁾。その結果をもとに効果的な叱り方の試案を提示し、学習理論の視点とカウンセリングの視点から分析をしている。学習理論の視点からは、不適切行動の消去と同時に適切な行動が起きた時の強化も不可欠であることや、叱るだけではなく「褒める」ことも同時に考慮する必要性について言及している。カウンセリングの視点からはロジャーズの人間観を引用し、叱られながら子ども自身に「気づき」が起これば、穏やかに叱るだけで十分な効果が期待できると述べている。

教師もまた「叱ること」で悩んでいる。吉岡(2011)は「叱ること」に関して教員向けの研修会の依頼を受けたが、以下の通りの依頼文を受けた。「教師は子どもを叱らなければならない場面があります。その子にとって絶対にしてはならないことについては、厳しく強く叱ることもあります。しかし、子どもの心に届かず、悩んでしまうことが多いです⁽²⁾。子育ての場面においても同様なことは起こりうると思う。子どもが望ましくない行動をした時に「絶対してはいけないこと」を強く叱責をして伝えても、子どもの心に届かず、筆者も子育ての時に不快感を感じる事が何度もあった。吉岡は「叱り方」や「叱る場面」についてアドバイスを求められ、「叱る」場面において、

幾つかの大事なポイントを指摘している。①叱られたら子どもも苦しむので、その後のフォローをしていくこと、②子どもが言語を理解する力がなくなっていると嘆くのではなく、大人が子どもたちの言語(表現)を理解する力がなくなっていると謙虚に認めること、③子どもが言い訳をする時に封じないこと、④子どもたちに価値観を伝える役目をもった教師であるとの自覚のもとに、真摯に子どもと向き合うこと、などである。

竹内(1995)は小学校の教育現場において、教師が子どもを叱るのは子どもの望ましくない行動を改善したいという思いでそうしているが、効果を評価するのに「子どもの変容」ということが用いられていると述べている⁽⁴⁾。竹内は子どもが「叱り」をどう受け止めているのかについて、子どもの「対教師感情」が教師の叱り言葉の受け止めを左右する、と分析し、「叱る側」と「叱られる側」との関係性を損なわない叱り方について示唆している。

また、叱ったことが効果を持たない場合があることについて竹内(1995)は子どもの側の好悪感情が影響し、「叱った相手が先生であるからいうことを聞くが反省しない」という反応を示す子どもが30%もいたという調査結果について公表し、「子どもが教師の叱りをどのように受け止めているのかについて検討していく必要がある」と言及している⁽⁴⁾。

教師に従って子どもの行動の改善が見られたとしても、表面的に大人しく従っているだけで、どう受け止めたのかということまでは見えにくいことがあるので、表面的な「子どもの変容」という視点だけでは子どもの心を見落とししてしまう恐れがある。

子育てにおいて叱ることは親にとっても何らかの緊張をもたらすし、激しい怒りなどの感情が喚起されることもある。「なるべくなら叱らずに育てたい」と思うのだが、そうとばかりも言っていない事態は次々と起こる。子どものやりたいようにさせるばかりではわがままな子に育てしまうのではと、望ましくないことを正すためにだ

とか、望ましい態度を身につけさせるために、だとかいくつかの理由で親は子どもを叱るということをしている。その際に子どもの行動が改善されたかどうかという結果にどうしても目を向けがちである。筆者も子育ての時に感情的になったり、子どもを正すということにウェイトを置き、子どもが謝ってその場がおさまると納得をしまい、子どもの心に何が残ったかという視点をもつ余裕はなかったように思える。

榎本(2020)によると「ほめて育てる」「叱らない子育て」などというキャッチフレーズを目にするようになって久しいが、実際に調査結果でもそれが反映されていると分析している⁽⁵⁾。榎本が大学生と社会人を対象に2015年に実施した調査でも、「小学校時代に先生からよくほめられた」という人が30代以上では37%なのに対し、大学生では53%と1.5倍になっている。親の態度に関しても「自分の父親は厳しかった」という人は30代以上で43%なのに対し、大学生では32%である⁽⁵⁾。「ほめて育てる」「叱らない子育て」が時代の風潮になってきているが、失敗を過度に恐れる子どもや若者が目立ち、傷つけないように配慮する子育てや教育は逆効果になっているのではないかと疑問を投げかけている。

三宮ら(1991)は叱りの問題への取り組みが、どう叱るべきかという規範論や叱り手側の言い分が中心になりがちであり、こうしたアプローチには限界があるのではないかと言及し、コミュニケーションとしての叱り・叱られを考えることを提案している⁽⁶⁾。

金澤(2021)は叱りによって伝わるメッセージについて吟味し、目の前の子どもをどう理解するかという視点を叱る側が意識することが大事であり、「一方的に指導する」「正す」ではなく、子どもの言い分を聴きながらかかわっていくことが大事であると述べている⁽⁷⁾。

第2節 主体性に関する先行研究

2017年3月に改定された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保

育要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明示され、「主体性」という表現が登場するようになった。この「主体性」の捉え方について大元(2020)は、学校教育の視点と児童福祉の視点では異なっていると指摘している⁽⁸⁾。

学校教育の視点では「主体的に活動」することが求められているが、大元は幼児の主体的活動は保育者との相互作用による影響が大きいとし、そこに教師がより良いと判断する適応的解決策を自発的に見出し、解決に至ることが最終到達点と目指されるので、子どもの主体的活動には、教師の意図する目標に達することまでが含まれているのだと問題を提起している。従来「自発性」や「自主性」という言葉は使われてきたが、今回の改定における「主体性」とは、あくまでも学校教育としての目標達成にむけて、教師が計画した教育目標に向けて子どもが向かっていくように方向づけられているのではないかと、疑問を投げかけている。

学校教育の場では、2012年に文科省の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(答申)において、アクティブ・ラーニングという言葉が初めて使われ、それに伴って大学ではそれを意識した教育の在り方を意識するようになった。筆者が当時勤務していた短大の保育学科でも授業の中にアクティブ・ラーニングを取り入れることが求められ始めた。しかし、2017年改訂の小・中学校学習指導要領では、アクティブ・ラーニングという言葉は消え、「主体的・対話的で深い学び」という表現に変わっている。それに伴って幼児期でも小学校への準備教育という位置づけから、「主体的な活動」という文言が入ってきたのはそうした流れが幼児教育にも導入されてきたことのあらわれのように思える。

大元は学校教育に合わせることを求められる「主体性」を「上意下達」の保育観と捉えている。一方児童福祉の視点は従来「子どもの最善の利益」が考慮され子どもを「主体」とする「下意上達」の保育観であり、子どもの今を大切にするという保育の場でもそれとは矛盾する「上意下達」の教

育観が保育における「教育」においても規定されたと捉えている。養護が重要だとされながらも、「教育のねらい」を達成することに重点が置かれた保育になるのではないかという懸念を表明している。

保育の場における研究では、竹内ら（2017）が子どもの主体性が優位な遊びについての分析をし、保育者の在り方や立ち位置によって、子どもの遊びが変容していくことを分析している⁽⁹⁾が、「叱る」場面における分析をした研究はまだない。

そこで本研究では、叱ることと主体性を関連させて分析をしてみたい。

第2章 保育者への調査

第1節 研究方法

現場で保育を実践している保育者を対象として、叱ることに関する質問紙による調査を実施した。

叱ることに関する幾つかの質問には自由記述で回答してもらい、叱られた子どもが受け入れられるようになるための理由づけについて、保育者自身がそれをどう感じるのかについて、4件法（1.非常に望ましい、2.どちらかと言えば望ましい、3.あまり望ましくない、4.全く望ましくない）で回答を求めた。また、叱ることによって、子どもの主体性の妨げになることがあると思うかどうかについて、5件法で回答を求めた。

調査対象者：本学の卒業生（令和3年3月卒業）
112名

調査時期：2023年10月6日～11月1日

調査方法：卒業生112名に質問紙を郵送し、同封した返信用封筒に入れて返送することを求めた。

有効回答数：25名

比較検討するために、同じ時期に本学の2年生30名に同じ質問紙を渡し、筆者の研究室の前の回収ボックスに提出してもらったところ、20名の学生から回答が得られた。

第2節 調査結果

質問1）「現在保育者として勤務していますか」には、25名全員が「はい」と回答した。

1 叱ることに対するためらい

質問2）「子どもを叱るかどうかためらう時がありますか。」「1.よくある」から「4.全くない」まで4件法で回答を求めた。

「4.全くない」という回答者は0で、「3.あまりない」という回答者が6名であったが、平均値が1.96で、叱るかどうか「2.時々ある」に近い数字であった。1と2を選択した回答者が19名あり、1と2の回答者に対して「それはどんな場合ですか」という質問と、「ためらう時にはどのようなことが気になったり心配になりますか」という質問に対して自由記述を求め、得られたものが、表1-1である。

保育者がためらう場合にはいくつかの場合が記述されていた。

A) トラブルが起きた経過を見ていない時

保育者の見ていないところでトラブルが起きた場合、「周りの子どもに〇〇くんがやったと言われたが、その場面を見ていない時に」叱る前に状況を理解しようとするだろうし、「何故その行動をとったのか、意図をつかめずに」ためらう気持ちになるようである。

B) 他の大人の目が気になる時

すぐ近くに保護者がいる時に「保護者の反応」が気になると書いた保育者もいた。また、「行事や送り迎えで保護者がいて、いけないことをしているが、保護者が何も注意したり叱ったりしない時に」保護者が何も言わないのに自分が叱っていいのかということや保護者の目が気になります」と保護者の前での対応に苦慮している保育者もいた。

一方で戸外に活動中に、子どもがしてはいけないことをしても少しためらってしまう保育者もいた。「園外散歩中、他の人や地域の人の視線があったりするために」そうしたためらいが生じるとの

表1-1 叱ることをためらう時にどのようなことが気になるのか

1～4	(質問) (叱るかためらう場合は) どのような場合ですか	(質問) ためらう時にはどのようなことが気になったり心配になりますか
1	おもちゃをわざととりに行ったり、いけないことをしたとき	自分が怒った時に口調が荒くなったり、わかってもらうためにどうしたらいいか
1	他児との物を介したやり取りの際や興味や関心から危険なことをしてしまったとき	子どもの興味や関心を妨げてしまうのではないかと いう心配
1	強い口調で言うとき	最近園児に対する虐待のニュースが増えたこと によって園内でも研修を行ったり、マニュアルがあっ たりなど、子どもに向かう姿勢が変化してきたため
1	その子の保護者がその場にいるとき	保護者の反応
1	子どもの思いや行動を優先するか、自分(保育者) としての「今は違う」という思いを優先するか迷っ たとき	今こう子どもに伝えて、果たして話を聞いてくれる のか。子どもの「～したい」という気持ちを自分が 壊しているのではないかと
1	行事や送り迎えで保護者がいて、いけないことをし ているが保護者が何も注意したり叱ったりしないとい き	あきらかにいけないことをしているため、叱ったり 注意したりしたいが、保護者が何も言わないのに自分 が叱っているのかということや保護者の目が気にな る
1	障害児の利用施設のため、その子に応じた対応が必要 だが、子どもにとって危険な行動だった場合、至急 制止しなくてはならない場合。	かんしゃく、パニックになり他害行為にならないか、 また、叱られていない子がそれを聞いてかんしゃく など不穏になってしまわないか
1	(未記入)	(未記入)
1	子どものしたことがいけないようなことの場合、子 ども同士のトラブルの場合	叱ることが正解なのか、その子どものためになっ ているのか、適切な声掛け、言葉選びができてい るか(年齢によっても)
2	・周りの子どもに「○○くんがやった」等言われたが、 その場面を見ていなかったとき ・何故その行動をとったのか、意図をつかめなかつ たとき	伝えたいことが上手く伝わっているか
2	戸外の活動時、子どもがしてはいけない事をしてい ても少しためらってしまう	園外散歩中、他の人や地域の人々の視線があつたりす るため
2	(ケンカ等で) どちらか一方だけが悪いととらえら れてしまいそうな場合⇒手が出たから叱るのか、互 いに思いがあったのではないかと	叱られるから謝るという考えになつてしまわないか
2	他の子をかんだり、叩いたり傷つけることをしたと き(悪気がなくて)	悪いことだと知らないで叱るか迷う。遊びの延長 で楽しくなつてしまった場合
2	保育者が子どものトラブル等を初めから見ていな かったとき	子どもの行動だけを見て、それはやってはいけない と決めつけるのは良くないのではないかと。子 どもの心情もくみとって、叱ることが大切だと思 う
2	グレーだと思ふ子がズボンを何回伝えても同じ方向 に足を入れたり、片手ではこうするとき。	グレーで、もしそうだった場合、これも何かしらの 特性なのかもしれない。それで、できないのかもし れないと思うから
2	友達を悪気なく叩いたりしてしまったとき	悪気がないということを見てとれたときに叱ってし まい、子ども同士の関わりがなくなってしまうの ではないかと心配になる
2	給食の準備など、自分でできる子が他児との話に夢 中になりなかなか進まないとき	できることを知っているため、見守りたいと思うが、 何度か声をかけてもできない場面、強く言うてしま うことがある。意欲的にできる声掛けを行いたい が、自分に余裕がないこともあり、難しく思う
2	互いに悪気はなかったけれど、行動がエスカレート してトラブルにつながったとき	どう伝えたら子どもの思いを傷つけずに叱ることが できるか
2	乳児を担当しているのだから、年齢的に叱るべきこと はまだ叱らなくてもいいことなのか、ためらうときが ある	叱るか叱らないかの自分の判断が正しいかどうか

ことである。

C) 悪気なくトラブルになった場合

「他の子をかんだり叩いたり、傷つけることをしたとき」に「悪いことだと知らないので叱るか迷う」「遊びの延長で楽しくなってしまった場合」という記述があった。また、「友達を悪気なく叩いてしまったとき」に「子ども同士の関わりがなくなってしまうのではないかと心配になる」と叱ることによって、子ども同士の人間関係に影響があるのではと、苦慮しているという記述があった。

D) 子どもの発達段階や発達障害に配慮する場合

乳児に対する迷いについての記述があった。「乳児を担当しているので、年齢的に叱るべきことかまだ叱らなくてもいいことなのか、ためらうときがある」。この保育者は「叱るか叱らないかの自分の判断が正しいかどうか」と悩みを書いている。

発達障害らしい記述も見られた。「グレーだと思う子がズボンを何回伝えても同じ方向に足を入れたり、片手ではこうとするととき」何度も同じことを教えてもできないときに「子どもの特性としてできないのかもしれない」と叱ることに対して効果的ではないと判断するようである。

E) 社会情勢の影響を受ける場合

「強い口調で言うてしまうとき」にためらいを感じる保育者は「最近園児に対する虐待のニュースが増えたことによって園内でも研修を行ったり、マニュアルがあったりなど、子どもに向かう姿勢が変化してきたため」と以前であったら強く叱るという対応が許されている、社会の目が厳しくなっていることを意識していた。

F) 子どもの思いを大事にしたい気持ちから

「他児との物を介したやり取りの際や興味や関心から危険なことをしてしまったとき」と回答した保育者は「子どもの興味や関心を妨げてしまうのではないかと心配」と書いている。また他の保育者は「子どもの思いや行動を優先するか、自分(保育者)としての「今は違う」という思いを優先するか迷ったとき」にためらいを感じ、「子どもの『～したい』という気持ちを自分が壊しているのではないか」という懸念を抱いていた。

また、別の保育者は「(ケンカ等で)どちらか一方だけが悪いととらえられてしまいそうな場合⇒手が出たから叱るのか、互いに思いがあったのではないか」とトラブルとなったときの子どもの思いを大事にしようと叱ることにためらいを感じ、さらに「叱られるから謝るという考えになってしまわないか」と叱られたことがその後どう影響するのかも吟味していた。

2 叱るときに心がけていること

質問3)「子どもを叱るときに気をつけていることや、心がけていることを教えて下さい。」という自由記述で得られたものを以下の5種類に分類したものが表1-2である。

- ①叱る前に配慮すること
- ②叱り方で気をつけていること
- ③叱るべきことの原則
- ④子どもの気持ちを尊重するための配慮
- ⑤保護者への配慮

保育者が子どもを叱るとき、様々なことに配慮していることが分かった。①「叱る前に心がけていること」として、「叱る意味について」考えてみるというのがあった。また、「集中して話を聞くことができる環境であるか」を冷静に考えるという記述もあった。

また、叱ることが「自分の感情をおつけたいからなのか⇒一度自分を落ち着かせる」というのもあった。保育者も叱る場合に感情的にフラットではいられないので、叱る前に自分のコンディションを整えるということをや心がけていた。

②「叱り方で気をつけていること」として、「大声を出さない」というのが3名、「目を見てしっかり話す」と書いた人が5名いた。目が合わないときは「目をそらすなどがいれば『先生お話しするよ』と声を掛けて目を合わせる」という具体的な声掛けもあげた人がいた。「感情的に怒らないように」や「だらだらと長く叱らないように心がけている」「ひとつのことに對して叱ること」など、叱る場面によって子どもが苦痛を感じる時間が長

表 1-2 叱る時に心がけていること

① 叱る前に配慮すること	<ul style="list-style-type: none"> ・集中して話を聞くことができる環境であるか ・叱る意味について ・自分の感情をぶつけないからなのか →一度自分を落ち着かせる
② 叱り方で気をつけていること	<ul style="list-style-type: none"> ・感情的に怒らないように ・だらだらと長く叱らないように心がけている ・声のトーンを普段より低くする ・大声は出さない (3件) ・ひとつのことに對して叱ること (不随して叱らない※原文のまま) ・目を見て話す (5件) (目を見てしっかり話す、目を見て同じ目線にする、目をそらすなどがあれば「先生お話してるよ」と声を掛けて目を合わせる、目を合わせて話すようにする、子どもの目をしっかり見ること)
③ 叱るべきことの原則	<ul style="list-style-type: none"> ・危険なことや命にかかわったり、怪我をしそうではない限り、叱らないようにしている ・他児を叩いてしまったり、テーブルに上がったりするなどいけないことはしっかりと伝えるようにしている ・相手にケガさせるような危ないことは叱るようにしている
④ 子どもの気持ちを尊重するための配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いの気持ちを聞き、代弁し、お互いの子どもの気持ちを受け止めた上で、本当にダメだということについては、しっかり言葉で伝わる言葉で伝えるようにしています ・叱るに至るまでに子どもの行動や気持ちを考えてから叱る ・何故そのような行動をとったのか理由を最初に聞くようにしている ・最初にその子を叱らずに、気持ちを受け止めてから行ったことへの話をする ・どうしてその行動をとったのか子どもたちの思いを聞き入れるようにしたいです ・人格や感情は否定せずに、きちんとその子の思いも受け止めること ・子どもの人格は否定しないこと ・現在4歳児のクラスの担任をしているので、保育者から一方的にいけないことを指摘するのではなく、子どもに「なぜそれがいけないのか」「どうしたらよかったのか」を問いかけ、一緒に考えるようにすることを心がけています ・先に子どもの気持ちを聞き、何がしたかったのかを理解し、子どもたちが分かりやすいように伝えている ・最後はギュッと抱きしめる
⑤ 保護者への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者へのアフターケア ・保護者の悪口は言わないこと

くならないようにと意識していた。

③「叱るべきことの原則」として、「危険なことや命にかかわったり怪我をしそう」になったときや、「他児を叩いてしまったり、テーブルに上がったりするなどいけないこと」などが例としてあげられていた。

④「子どもの気持ちを尊重するための配慮として」いくつかの工夫が記述されていた。

「叱るに至るまでに子どもの行動や気持ちを考えてから叱る」や「何故そのような行動をとったのか理由を最初に聞くようにしている」など、まず子どもに問いかけてから指導するという保育者が複数いた。他児とのトラブルの際には「お互いの気持ちを聞き、代弁し、お互いの子どもの気持ちを受け止めた上で、本当にダメだということに

ついては、しっかり言葉で伝わる言葉で伝えるようにしています」のように、それぞれの子どもの思いを代弁した上で「いけない」ということを伝えようとしていた。また、4歳児クラスの担任をしているという保育者は「保育者から一方的にいけないことを指摘するのではなく、子どもに『なぜそれがいけないのか』『どうしたらよかったのか』を問いかけ、一緒に考えるようにすることを心がけています」と認知面にも働きかけていた。また、叱った後で「最後はギュッと抱きしめる」という回復を支える働きかけをしているという記述もあった。

3 叱られたことを子どもはどう納得するのか
質問4) 子どもが叱られることで「望ましくない

い行動」をやめたり「望ましい行動」をとれるようになるには時間がかかることもあります。それができるようになるためには、子どもの中で何らかの理由づけがあると考えられます。次にあげた理由について、あなたがどう感じるかを（1.非常に望ましい、2.どちらかと言えば望ましい、3.あまり望ましくない、4.全く望ましくない）の中からひとつ選んでください。

子どもの行動が改善されるとき理由付けとして保育者がどの程度望ましいと感じているかについて次の①～⑫の項目について回答を求めた。

①やってはいけないことだと知らなかったが理解した、②叱られるのはいけないことだから、③周りの子どもたちから嫌な目で見られるから、④遊んで貰えなくなるから、⑤保育者を悲しませたくないから、⑥保育者に良い子だと思ってほしいから、⑦叱られるのが恥ずかしいから、⑧叱られるのが怖いから、⑨友だちに嫌な思いをさせたことが分かったから、⑩いけないと教えられていたが、どんな結果になるかということが分かったから、⑪「その行動」以外の行動を見つけたから、

⑫「いけないことをしなければならなかった」気持ちや状況を保育者に受け入れて貰えたから、である。

①～⑫それぞれの理由に対して4件法で回答してもらった。また、同じ質問に対して学生20名の回答の平均値と比較したものが、表1-3とグラフ1-1である。

保育者の平均値は①1.36 ②2.80 ③2.96 ④3.12 ⑤3.00 ⑥3.12 ⑦3.12 ⑧3.24 ⑨1.40 ⑩1.76 ⑪1.68 ⑫1.67となった。学生の平均値は①1.45 ②2.75 ③2.80 ④2.75 ⑤2.55 ⑥2.70 ⑦2.80 ⑧2.85 ⑨1.25 ⑩1.50 ⑪1.60 ⑫1.45となった。

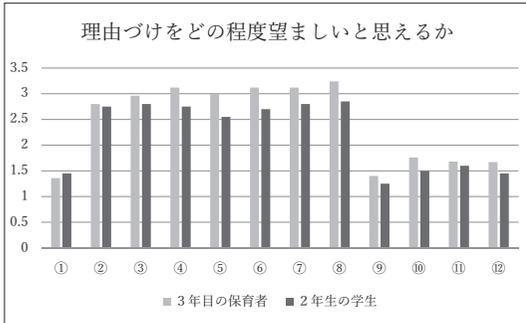
グラフの形は卒業生、学生共によく似た形が得られた。

各項目ごとの値は項目①だけは卒業生<学生となり、②～⑫については全て卒業生>学生となっている。各項目について保育者の評定値と学生の評定値のt検定を試みたところ、有意差があった項目は⑤だけであった。⑤（保育者を悲しませたくないから）の項目で $t(43) = 0.046, p = .05$

表1-3 理由付けをどの程度望ましいと思えるか

1.非常に望ましい 2.どちらかと言えば望ましい 3.あまり望ましくない 4.全く望ましくない

	3年目の保育者	2年生の学生
① やってはいけないことだと知らなかったが理解したから	1.36	1.45
② 叱られるのはいけないことだから	2.80	2.75
③ 周りの子どもたちから嫌な目で見られるから	2.96	2.80
④ 遊んで貰えなくなるから	3.12	2.75
⑤ 保育者を悲しませたくないから	3.00	2.55
⑥ 保育者に良い子だと思ってほしいから	3.12	2.70
⑦ 叱られるのが恥ずかしいから	3.12	2.80
⑧ 叱られるのが怖いから	3.24	2.85
⑨ 友だちに嫌な思いをさせたのが分かったから	1.40	1.25
⑩ いけないと教えられていたが、どんな結果になるかということが分かったから	1.76	1.50
⑪ 「その行動」以外の行動を見つけたから	1.68	1.60
⑫ 「いけないことをしなければならなかった」気持ちや状況を保育者に受け入れて貰えたから	1.67	1.45
質問5. 叱ることによって、子どもの主体性の妨げになることはあると思いますか（5件法） （1.非常に妨げになると思う、2.やや妨げになると思う、3.どちらともいえない、4.あまり妨げにはならないと思う、5.全く妨げにならないと思う）	2.44	2.65



グラフ 1-1

となり、5%水準で有意差があった。この結果から、「保育者を悲しませるからやらない」という納得の仕方は、学生よりも保育者の方がより「望ましくない」と感じていることが分かった。

「3. あまり望ましくない」に近い数字になったのは②「叱られるのはいけないことだから」、③「周りの子どもたちから嫌な目で見られるから」、④「遊んで貰えなくなるから」、⑤「保育者を悲しませたくないから」、⑦「叱られるのが恥ずかしいから」、⑧「叱られるのが怖いから」であった。保育者は「叱られる＝いけないこと」という認識を持ってほしくないと思っている。また、③「周りの子どもたちから嫌な目でみられるから」④「遊んで貰えなくなるから」も、結果的に不利益になるからという形で納得はしてほしくないと思っていることが分かる。さらに、⑤で「保育者が悲しむから」という情緒的な観点で子どもが納得することも、⑥「保育者に良い子だと思ってほしいから」という理由で行動を改善することも望んではいないことが分かる。また⑦「叱られるのが恥ずかしいから」と⑧「叱られるのが怖いから」から叱られることによって恥ずかしい思いをしたり、怖い思いをするので、と罰を受けることが抑止力になることも望んではいないことが分かる。

「2. どちらかと言えば望ましい」に近い数字になった項目は①「やってはいけないことだと知らなかったが理解したから」、⑨「友だちに嫌な思いをさせたことが分かったから」、⑩「いけないと教えられていたが、どんな結果になるかという

ことが分かったから」、⑪『その行動』以外の行動を見つけたから」、⑫『いけないことをしなければならなかった』気持ちや状況を保育者に受け入れて貰えたから」であった。これらの項目は認知面での変化であったり、背後にある子どもの思いを保育者が受け止めたときに子どもが納得するという理解の仕方を望んでいることが分かる。

4 主体性との関連

質問5) 叱ることによって、子どもの主体性の妨げになることはあると思いますか。次の5つの中からあなたの考えに近いものを選んで下さい。

(1. 非常に妨げになると思う、2. やや妨げになると思う、3. どちらともいえない、4. あまり妨げにはならないと思う、5. 全く妨げにはならないと思う)

保育者も学生も1と5を選択した回答者はおらず、保育者の平均値は2.44であり、「2. やや妨げになる」と「3. どちらとも言えない」の中間値に近いものだった。それに対して学生の平均値は2.65であった。t検定をしたが、有意差は得られなかった。

なぜそう思うのかについて、まとめたものが表1-4である。

「2. やや妨げになると思う」「3. どちらとも言えない」で妨げになる理由としてあげられたことは「子どもの感情を委縮させてしまうから」「叱りすぎることによって、その子の性格自体を否定してしまう可能性があり、将来の育ちにも影響する」「なんでも否定する（叱る）のは子どもの自立心や自我の芽生えを妨げることにつながるかもしれないから」「選択をなくしたり“安全”という言葉をとって子どもたちのやりたいことを妨げているから」「自分の気持ちを表に出すことに消極的になってしまうのではないかと様々な記述が見られた。叱られることで、子どもがきちんと理解をして納得するのではなく、その影響として「自分の気持ちを出せなくなる」「叱られるのは嫌なことだから行動しない」という行動につながることにに対して懸念を示していた。

表 1-4 叱ることによって子どもの主体性の妨げになることはあると思いますか

(1.非常に妨げになると思う、2.やや妨げになると思う、3.どちらともいえない、4.あまり妨げにはならないと思う、5.全く妨げにはならないと思う)

評定値	(質問) 何故そう思うのかを教えてください
2	子どもの感情を委縮してしまうおそれがあるため、叱る時に言葉を考えなければいけないと思うから
2	子どもにとっては学びの一部でもあるから。大人にとっていけないと思うことでも子どもにとっては“経験”であると思う
2	叱ることによって何を行っても注意を受けると思い、チャレンジの気持ちがなくなる
2	選択を無くしたり、“安全”という言葉をとって子どもたちのやりたい事を妨げてしまったりしているから
2	自分の気持ちを表に出すことに消極的になってしまうのではないかと思うから
2	叱られることを恐れてやってみたくいけど叱られたらどうしよう、もし叱られるならやりたくない、と思う子もいると思うから
2	悪意を持ってやったわけではないのに、その子自体や人格を否定する叱り方もあるから
2	叱られることはどんな子どもにとってもストレスであり、その気持ちが大きくなると、自分の気持ちが出せない子どもになったり、見えない所で発散するようになってしまうから。また「叱られた」という状況から、大人の話が入ってこないため、なぜ叱られているのか理解できず、同じことをしてしまう
2	子ども自身が興味・関心をもって行動をしようとした時に「もしかしたら前のように叱られるのではないか」「これはやっていいことなのか」と考えてしまうことが考えられるから
2	駄目なことについて、叱ってもらうことにより、物事の良い悪いを知ることができるため、正しい叱り方は良いと思うが、むやみに叱るのは、子どもが、自分の考えや思いを伝えなくなると思う
2	子どもたちなりに考えてとった行動である為、子どもの気持ちを考えると叱ることでも自分の思いを伝えられなかったり、行動できなくなってしまうのではないかと思う。他児を傷つけてしまうことは「望ましくない行動」となる為、叱ることも必要な場面もあると思った
2	「危ないこと」「相手が嫌だと思っていること」などは未満児では理解しきれない子どもも多いと考えていて、「叱る＝嫌なこと、だから行動しない」となったり、強い恐怖や不快感を感じるため、保育者の顔を伺うような子どももいると思うから
2	この行動をとったら怒られてしまうかもしれないからやめようという気持ちが出てしまい言いたいことやしたいことが自由にできなくなってしまう場合があるかもしれないから
2	やってはいけないことの行為だけを叱るなら主体性の妨げにはならないと思うが、子ども自体を否定するような叱り方をすれば、子どもは怖がって声をあげにくくなったり行動できなくなったりしてしまうと思うから
2	叱ることにより、恐怖心が高まり（その保育者に対し）「叱られたくない」という気持ちから主体的に行動ができなくなると考えた
2	(未記入)
3	叱りすぎることによって、その子の性格自体を否定してしまう可能性があり、将来の育ちにも影響するが、叱りすぎない（叱らない）ことは何でもアリな行動に反映されるのではないかと思うから
3	・叱ることで善悪の判断がつくようになったり、学びになったりする場合がある ・叱られることで、委縮してしまったり、大人の目を気にしてしまったりする場合がある
3	時と場合によると思う。主体性ばかり尊重すると協調性などに欠けてしまうかもしれないし、何でも否定する（叱る）のは子どもの自立心や自我の芽生えを妨げることにつながるかもしれないから
3	・してはいけない事やともだちや周りの子が悲しい気持ちになったり、泣いてしまったりする事は、子どもが楽しい、面白いと感じていても、それは絶対にいけない事なので、叱ることが妨げになるとは言い切れないと感じるから
3	その子によって「叱られるかも」という思いから委縮してしまったり、叱られないようにと行動してしまったりする場合もあるため、叱ることが主体性の妨げになってしまうこともあると思う。しかし、叱ることで自分の何がいけないのか、どうすればよかったのかを学び、適切な方法で自己主張したり行動したりできると思うので、叱ることで主体性が伸びていくこともあると思うため、どちらとも言えない
3	叱らなくても自己主張が強く、自分が一番だと思ひ込む子がいると思うし、叱ってばかりいれば自己肯定感が失われていくと思うので、どちらも必要で、妨げになることはあるともないとも言えない
3	主体性を高めるためにも、良いこと悪いことの区別ができるよう、叱ることも必要であると思うが、子どもの捉え方によっては妨げになるのかなと思った
4	いけないことはしっかり叱るべきであり、叱ることによって子どもにとって学びになっていくから
4	仕事として、担任をしているわけではないため、第一に保護者の方にお任せしているが、危ないことや本人が傷つくことに関しては叱りは必要であると思うから。将来園に入ったり社会に出たりしてから考えて・・・

「4.あまり妨げにはならないと思う」の回答者は2名いたが、その理由として「いけないことはしっかり叱るべきであり、叱ることによって子どもにとって学びとなっていくから」「仕事として、担任をしているわけではないため、第一に保護者の方にお任せしているが、危ないことや本人が傷つくことに関しては叱りは必要であると思うから。将来園に入ったり社会に出たりしてからを考えて・・・」という記述であった。

第3節 考察

1 叱ることは必要なことか

「出来れば」叱りたくない、というのは親も保育者も望んでいると思う。本研究に協力してくれた保育者たちの率直な意見として、叱りたくはななくとも子どもを叱らなくてはならない事態はしばしば発生することがあることも実態として言及されている。アタッチメントの視点で捉えるならば、愛着の対象者を心理的安全基地として利用しながら子どもは探索行動をすることができる。その際に危険なことも起こりうるが、子どもは体験を通して様々なことを学んでいく。本研究に協力してくれた保育者の率直な意見として「子どもにとっては学びの一部でもあるから。大人にとってはいけないと思うことでも子どもにとっては“経験”であると思う」とあるように、大人にとっては望ましくないことであっても、子どもにとっては大事な体験のひとつとして位置づけることができる。善悪の判断や道徳的なことも、子どもは関わっている周りの大人との関係の中で教えられ学んでいく。また、保育現場では遊びの中で子どもは様々なことを学び、周りの友だちとのいざこざもまた学びの機会になる。いざこざを通して様々なことを学んでいくが、そこで保育者のかかわりが重要な鍵になっている。

友定ら⁽¹⁰⁾はトラブル場面における保育者の関わりを(1)共生の体験を伝える、(2)一緒に解決法を探す、(3)自己回復を支える、(4)価値・規範を伝える、の4つに分析し、(4)の具体例として説諭・説得をあげた。保育者が子どもを叱ると

いうのもこの(4)に該当する。質問4に回答した保育者のひとりも「いけないことはしっかり叱るべきであり、叱ることによって子どもにとって学びになっていくから」(評定値4.あまり妨げにはならないと思う)と断言している。叱られることによって子どもは自分の行動がいけないことであると気がつくことになるので、叱ることは必要なことであると親も保育者も認めている。しかし、叱ることにためらいを感じる理由のひとつとして、「叱られることで、委縮してしまったり、大人の目を気にしてしまったりする場合がある。」(表1-4の評定値3.どちらともいえない)ということも記述されていて、これもまた保育現場における実感だと捉えることができる。

叱ることについて近年非常に否定的な意見もあった。村中(2023)は、叱ることに伴い、脳内で神経伝達物質のドーパミンが分泌され、快感を伴うので「叱る側の欲求を満たすという効果は満たすが、叱られる側にとっては課題解決にはつながらない」と断定している⁽¹¹⁾。その理由として村中があげているのは、恐怖や不安などのネガティブな感情を喚起させ、叱る側にとっては攻撃的な言動で相手をコントロールすることになるからだと説明をしている。もし、攻撃的にならなくてもよいのなら、「言い聞かす」「説明する」などの他の言葉に置き換えることが可能なので、わざわざ「叱る」ではなくてもよいはずだと問題提起している。

質問4の回答で複数の保育者が「叱ることによって子どもが委縮してしまうのでは」と懸念していることは、そうしたネガティブな感情を喚起させることと関係しているのではないだろうか。しかしながら、子どもが危険なことをしてしまったり、他の子どもに対して感情のコントロールができずに叩いてしまったり、様々ないざこざは保育現場ではよく起こり、学生たちが実習先でもしばしば体験し、実習日誌にもその記録が必ずと言っていいほど書かれている。

子どもの年齢が上がるとトラブルが起きて子どもだけで問題解決しようとする姿も見られるよ

うになるが、発達の幼い場合はそれは難しく、待ったなしに保育者はその場の対応を求められる。そこで保育者の対応のひとつとして、「叱る」ということもとられている。「叱り方」にも様々なやり方があり強い口調で制止をする場合だけではなく、「教える」「諭す」というのも含めて保育者は「叱る」と捉えているのではないかと思われる。日々迷いながら「叱る」場面でも子どもと向き合おうとしている姿が本調査でも伝わってきた。「叱る」必要がある場面は日常的に必ず起こるので、そのときに「いかに子どもを傷つけないか」「子どもの主体性をいかに妨げないで学ばせるのか」ということに保育者たちは常に心を砕いている姿が読み取れた。

2 叱る際のためらいについて

保育者が叱るかどうかためらう場面がいくつか記述されている。(表1-1参照)

- A) トラブルが起きた経過を見ていないとき
- B) 他の大人の目が気になるとき
- C) 悪気なくトラブルになった場合
- D) 子どもの発達段階や発達障害に配慮する場合
- E) 社会情勢の影響を受ける場合
- F) 子どもの思いを大事にしたい気持ちから

A) の場合、周りで見ている他の子どもの話や当事者の子どもの話を聴きながら対応をしなくてはならなくなる。保育者の目の前で起きていることであつたらトラブルの原因や経過も理解できるだろうが「多分こういうことだろう」と想定しながら指導をしていかななくてはならないので、正しい対応ができるかどうかという迷いが生じるのは想像できる。

B) の場合は、例えば保護者が側について注意をしない場合、つまり保護者が問題だと思っていない場合は保育者がそこを正していいものか、という戸惑いの気持ちが出てくるのは想像できる。保育中は子どもとの関係の中で保育者の裁量で叱るということをしているのだが、そこに保護者がいる場合は保護者がどう感じるのか、ということも

配慮しながら対応を考えなくてはならないので、判断が難しい。また、園外保育のときに地域の人の目が気になるというのは、最近「不適切保育」という言葉が使われていることの影響もあると思う。保護者が近くにいる場合も、地域の中で指導する場合も、研修などを通してトラブルにならない対応の仕方について検討していく必要があると思われる。

C) の場合、トラブルになることは子どもにとって想定外であり、「遊びの延長で楽しくなつての場合」という記述や「子どもの興味や関心を妨げてしまうのではないかという心配」を抱くという記述もあった。楽しく過ごしたいという子どもの心にストップをかけて指導することに抵抗感を持つようだ。

D) 乳児の発達段階で理解させる際の苦労や、何度教えても同じことを繰り返す子どもに対しては、発達障害の視点で、子どもの特性に合わせた「叱るのではない」指導を考えようとしていた。

E) 社会情勢の影響を受ける場合

最近子どもに対する虐待など「不適切な保育」をする施設の報道が続いている。本調査の協力者たちの中にも、子どもを叱る際に「これも不適切保育と指摘されるのでは」、とためらいを感じてしまうという意見があつた。これは「叱ることに関連して感じたり思うことがあつたら自由にお書き下さい」という質問紙の最後に書かれた感想の中にあつた。具体的にどのような場合が「不適切保育」として問題になるのかを、保育現場の中で改めて共通理解する必要性を感じた。

F) 「子どもの『～したい』という気持ちを自分が壊しているのではないか」という懸念を抱く保育者がいた。「できることを知っているため、見守りたいと思うが、何度声をかけてもできない場合に強く言うてしまうことがある。意欲的にできる声掛けをしたいが、自分に余裕がないこともあり、難しく思う」と子どもが主体的に行動するのを望んでいるが、何度促しても行動しないときに難しいと悩んでいる保育者もいた。

3 叱るときに保育者が心がけていること

改めて本研究で、保育者たちが叱る場面において様々なことに配慮していることが読み取れた。

叱る前に配慮することや、叱り方で気をつけていることや、どんな場面で叱るべきかを意識し、ためらいながらも子どもと一生懸命に向き合おうとしている姿が浮かんできた。できるだけ子どもの気持ちを受け止め、一方的な指導にならないように、まずは叱る前に子どもの話を聞き、子どもにとっても納得ができるように「どうしたらよかったか」を問いかけたり「なぜそれがいけないか」を理解させるように努めたりしていた。

結果的に行動が改善されれば良し、というやり方ではなく、子どもがどう納得して受け止めるのかのプロセスにも大事に関わっていると思えた。

保育者のかかわりとして、友定ら（2007）は(1)共生の体験を伝える、(2)一緒に解決法を探す、(3)自己回復を支える、(4)価値・規範を伝える、の4つの観点をあげているが⁽¹⁰⁾、叱る場面においては(1)から(4)の全てのかかわりを組み合わせて保育者たちは子どもに働きかけていると思えた。叱られることが子どもの自尊心を傷つけることも、「保育者が悲しむからやらない」というような感情に訴えることも望んではいなかった。「叱られる」体験の中から子どもが社会で生きていく上で必要なことを理解し、成長の助けになるようなサポートを保育者たちが大切にしようとしていた。卒業して3年目の保育者たちが、現場で多くの困難なことを経験しながら、難しい「叱る」という場面においても戸惑いながらも子どもと真摯に向き合っている姿が伝わってきた。子どもの成長にかかわる保育者たちが、自らも悩みながら成長をしていることを筆者も実感した。

4 叱ることは主体性の妨げになるのだろうか

叱ることは主体性の「あまり妨げにならない」と回答した保育者は2名であった。23名の保育者が「やや妨げになる」「どちらともいえない」と回答していた。遊びの活動の中で子どもの主体性を大切にしているが、叱るという場面において

も「主体性」ということを意識してみると、日頃の保育場面において大切にしている主体性との間で板挟みになることがしばしば起きていると推察された。

丹羽（2012）は叱り方が子どもに与える影響についてレビューし、叱りが効果を持つメカニズムとして、学習理論でいうオペラント条件づけについてふれ、「叱りが罰になっていないと効果的ではないことを確認した」と述べている⁽¹²⁾。ここで注目されているのは結果的な行動変容であり、そこに至るまでの子どもの心の中のプロセスや、主体性という観点は一切ないと思われる。従来から「鉛と鞭」という言葉が躰の場面ではよく言われてきたが、『広辞苑』（第7版）によると「ピスマルクが社会主義者に対してとった政策で、弾圧と譲歩を併用したこと」である。服従と懐柔を目的としたやり方で、それが教育や子育てや様々な場面で用いられてきた。望ましい行動に対しては褒め、そうでない行動に対しては罰として叱ることが昔ながらの子育てでは使われてきたが、叱り方によっては子どもとの関係がぎくしゃくしたり、子どもが叱られてばかりだと委縮してしまったりということもあり、子育てにおいても叱り方は悩みの種のひとつだと思われる。罰として強く叱れば子どもは「叱られないように」と叱り手の望むよう行動を変える可能性は高いと思う。しかし、本調査に協力してくれた保育者たちは、子どもをただ感情に任せて怒ったり「恥ずかしい思いをさせる」や「怖い思いをさせる」という「罰としての叱り」を望ましいとは思っていないことが調査結果からも分かってきた。「叱る」という行為は対等な立場において使われる方略ではないので、保育者たちは叱らなくてはいけない場面で、子どもとの上下関係を利用してその場を収めるのではなく、できるだけ子どもの立場にたった上で「いけないこと」や「望ましくないこと」を伝えようと努力している様子が窺い知れた。「叱ること＝主体性の妨げ」というわけではないが、主体性の妨げになる叱り方というものあって、それを避けようと様々な工夫をしている

のではないかと思われる。

子どもの成長を願いながら叱る際には大人の価値観を押し付けるのではなく、出来れば子ども自身が考えて善悪の判断などを理解して身に付けてほしいという、保育者の願いがそこにあると感じられた。子どもを尊重し、「子どもの興味や関心を妨げたくない」と思いながらも叱らなくてはならない場面では、ためらいを感じるがあると、正直に回答をしてくれた。

「叱ることがときには主体性の妨げになってしまうのではないか」という疑念は叱ることに慣れていっても持ち続けて吟味して欲しい大切な気づきではないかと思う。

5 叱りと主体性の育ちについて

「叱られることが学びにつながる」という回答があった。叱られたことによって望ましくない行動について学ぶという学習理論の立場と同じであるが、ここで重要なのが「なにを学ぶか」ということである。叱られることによって自らの行動が不適切であることを学んでほしいというのが、叱り手の思いであるが、叱られる体験はそれだけではすまない。自分の姿を否定され、ネガティブな感情も喚起されるし、ときには「叱られると怖い思いをする」「恥ずかしい気持ちになる」「周りの友達から遊んで貰えなくなる」ということを学ぶこともある。もし、一方的に叱られて終わる体験をしてその後何度も繰り返されるとしたら、叱られているときに受動的にその場をやり過ぎていたということになるだろう。あるいは「いけない」ことは伝わったが、子どもの中で納得出来なかったということになるのではないだろうか。

それゆえ保育者たちは子どもの気持ちをまず先に聞き、その気持ちに寄り添いながら、「叱られる体験」を学びの場としても大切にしているのではないだろうか。保育者に対する罪悪感から行動を制御していくことも良しとはせず、大人の価値基準を意識した「良い子」ではなく、子どもが自ら考えて、幼児期を終えても規範意識を自分のために持つてほしいと、保育者は願っているのでは

ないかと推察した。

子どもが保育者と共にやりとりをし、学んでいくプロセスを経て、子ども自身が「もうやらない」「次はこうしよう」と自己決定ができたときに、それが主体性の現れではないかと考えた。

川田（2019）は幼児期の主体性の捉え方を「見るからに積極的な姿を必ずしも意味しない」と述べている⁽¹³⁾。川田は主体性を「子どもが周囲とのあいだに結んでいる関係の状態」と定義し、消極的な姿であっても、子どもが他者や環境との関わり方で模索している姿を主体性の発達と捉えている。叱られるという体験は、叱る側が何を意識するかによってはともすると受動的になりがちである。一度叱られたからといって行動がすぐに改善されずに、同じことを繰り返すこともある。その都度保育者が根気強く大事なことを伝えていくことによって、子どもの中に納得する気持ちが育っていくのではないだろうか。何度も叱られる経験をしてある日行動が改善されたときに、内在化されたものが自己決定に活かされた姿を見ることが出来る。この自己決定までのプロセスには時間がかかり、いくつかの体験を子どもが自分の心の中で積み重ねていくプロセスそのものが、「叱られることによって育つ」主体性の芽生えなのではないだろうか。

第3章 まとめと今後の課題

本研究では3年目の保育者たちの調査データから、保育者が叱る際にどのようなことに配慮しているのか、子どもにとってどのような体験を望ましいと考えているのかについて、検討をすることができた。「主体性を育てるための叱り方」を保育者が意識しているわけではないが、「主体性を妨げないために」様々な工夫をしていることが分かった。叱られるという行為は受動的なものであるが、そこで保育者が子どもの心に寄り添いながら丁寧に関わっていくことによって、叱られた経験もまた、主体性の芽生えに繋がるのではないかと思われた。

本研究は調査協力者が3年目の卒業生25名という限定した調査結果である。今後はさらに多くの保育者に対して、経験年数が影響するのかも分析項目として検討していきたい。

また、「主体性」を保育者がどう捉えているのかによって、関わり方も異なってくると思われるので、「主体性の捉え方」と叱り方の関連性についても検討していきたい。

謝辞

本論文の執筆にあたり、アンケート調査に協力してくれた本学の卒業生たちに心から感謝しています。真摯に子どもと向き合っているその姿から、保育者としての成長を感じ、多くを学ぶことができました。

引用文献・参考文献

- (1) 榎本博明 (2021) 『自己肯定感という呪縛：なぜ低いと不安になるのか』青春出版社
- (2) 吉岡恒生 (2011) 『叱ること』についての臨床教育学的考察 愛知教育大学教育創造開発機構紀要 vol1 pp.183-190
- (3) 川島真 (2004) 「子どもの叱り方について」尚美学園大学芸術情報学部紀要第3号 pp.119-128
- (4) 竹内史宗 (1995) 「子どもは『叱り』をどのように感じているか」教育心理学年報 vol34 pp.143-149
- (5) 榎本博明 (2020) 『ほめて育てる』『叱らない子

育て』の流行が恐ろしすぎるワケ」ゴールドオンライン <https://gentosha-go.com/articles/-/29582>

- (6) 三宮真智子・遠藤由美ら (1991) 「自主シンポジウム6 叱り・叱られをコミュニケーションとしてとらえる」日本教育心理学会総会発表論文集33 pp.J11-J12
- (7) 金澤久美子 (2021) 『叱り』によって伝わるメッセージに関する一考察 ～子ども時代の叱られ体験をもとに～ 聖園学園短期大学研究紀要第51号 pp.25-37
- (8) 大元千種 (2020) 「幼児教育・保育における子どもの主体性についての考察」別府大学短期大学部紀要 第39号 pp.43-55
- (9) 竹内勝哉・柳澤弘樹・堀昌浩・坂本喜一郎・井量昭 (2017) 『子どもの主体性をはぐむ保育』に関する研究 保育科学研究第8巻 pp. 93-112
- (10) 友定啓子・白石敏行・入江礼子・小原敏郎 (2007) 「子ども同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか - 『トラブル場面』の保育的意義」山口大学教育学部研究論叢 第3部 57 pp.117-128
- (11) 村中直人 (2022) 『<叱る依存> がとまらない』紀伊國屋書店
- (12) 丹羽智美 (2012) 「叱りの意味を再考する - 子どもの成長を促す叱りとは -」子ども未来学 研究第7号 pp.25-30
- (13) 川田学 (2019) 『保育的発達論のはじまり：個人を尊重しつつ、「つながり」を育むいとなみへ』ひとなる書房